別府大学
NOV.2 1.19
図書館

昭和四十六年三月十五日発行

佐伯史談

第七十三号

「郷土史研究」誌
通算第九十五号

佐伯史談会
事務所 佐伯市大字稲垣字龍護寺 羽柴方

論説

美しい佐伯の自然を守ろう

—我らの公害対策を考える—

佐伯史談会
副会長 羽柴 弘

山紫水明と謳われ、橋の上から川底におよぐ魚の群が数えられて居た番匠川が、ドス黒くよごれてしまつても久しい。以前なら池船橋の上手や、佐伯大橋から長瀬橋にかけてズラリと並んでいた白魚とりの姿、それは早春の風物詩となつて我々を楽しませてくれていたが、去年から全く見かけないようになつた。故藤井亜伯は『佐伯昔と今』の表紙に書いて二百年の明治百年記念誌に寄せさつた。煙管をくわえて脱ぐみーしている老爺の姿、と、れた白魚を運ぶ河岸の女、もやつている何艘かの小舟、この河岸にもバイパスからの道路工事がはじまつている。のでハあの「お俊事」一帯の昔ながらの面影は、もうすぐなくなつてしまう。これは大変なことである。

旧制佐伯中学校の校歌として市民にも知られ、今も殆んどそのまま鶴城高校が受け継いで校歌として生徒の愛唱している中に

城山の松　馬場の松
風にうそぶき雲を呼ぶ
雄々しき姿　これぞこれ

とうたい結んでいるが、馬場の生徒に城山の城址に松は今いただの一本も残いされ校舎までも食い荒らの操業による松喰虫の被害である。生徒諸君にはまことに気の毒、ありもしない松の姿、いや、佐伯市南部は殆んどその山野から松を失なつてしまつている今日、毎年の風雪に堪えて高く聳えている雄々しい姿を、一体どんなイメージを描いて歌うのであろうか。まことにおそしい話である。

海岸には七メント会社があり、その粉塵の害が昨年から強く叫ばれるようになつた。私はすぐ近くにある大宮八幡の鬱蒼たる社叢を惜しみたい。昼尚暗くうす気味わるい程の森で、波うち際から暖地

本号内容

論説 美しい佐伯の自然を守ろう …… 羽柴 弘 …… 一
研究 政宗信仰と佐伯氏の周辺 …… 佐藤貫一 …… 二
〃 戦国時代における佐伯氏の居館について …… 山野井徹 …… 十
〃 大島開拓の古文書について …… 羽柴 弘 …… 十八
史跡 丹賀花台の墓碑 …… 羽良主殿 …… 九
書評 佐吉大臣系譜に寄せて …… 木田 長 …… 三
伝承 剛谷寺古仏の由来 …… 古仏法例 …… 四
〃 佐伯と国木田独歩 …… 中尾貞夫 …… 五
〃 佐伯の野球振興記 …… 高木秀吉 …… 五
書評 佐藤貞夫著『中世豪族の研究』 …… 後藤宏行 …… 六
〃 『佐伯史談』第九十五号 …… 佐伯史談会 …… 七
編集後記 …… 其他 …… 八

海岸の故にか成育旺盛、つややかに葉の光っている闇葉樹の老木がすき間なく密林をなし、参道をはさむようにして見事な松並木が空高く聳え、小鳥が多く、時には名も知らぬ怪鳥が叫び交わしい声さは廣く、私は県南第一の社叢としてマークしていた。今は見る影もない。これ全くセメント会社が出す粉塵のなせる業である。

昨年は公害に明けて公害で暮れた年であったと言われた。然しそれはそのまま今年に引き継がれている格好である。今私は興人とセメント会社に関する公害をとり上げたが、この種産業公害はその企業の種類大小にかゝわりなく、大なり小なり必ず伴っているという。つまり繁栄に伴うべき必然的なかげりである。交通公害も軽視出来ない。騒音、振動、排気ガス、そして交通事故が虎視眈々と我らの生命までねらっている。これは何とかしなくてはならない。

梅の便りなどささやかれる昨今、窓から見る遠い山はうす紫にかすみ、あちこちの山裾、篁(たけむら)の杉は、霜に葉が焼けて美しい彩りをそえている。早春である。

早春の番匠川の風物詩に、前にあげた白魚とりと共に今一つ、青海苔(あおのり)とりがある。解禁と共に十数隻の小船が長瀬橋の上下に、入り交れて長い棹をつかい、長く伸びた海苔を争うようにつむ。大袈裟に言えば壇ノ浦合戦のようである。通勤の途中自転車をとめて潮干から見るが、どうも今年はその海苔のつきがわるいようである。

この長瀬橋のあたりでは、年中通じて蜆(しじみ)がとれる。春から夏にかけては汐さえよければ毎日何十人もの賑わいであるが、この頃の寒さでもほつている。公害でこの蜆もとれなくなる日が来るのではあるまいか。

白魚が全くとれなくなった。ぼらは釣れるが臭いという。去年の秋は鯊(はぜ)が釣れなかったとも言う。子供達は水泳も出来ない。且つて四木四独歩が、四周の山並と共にその美しさをたゝえた番匠の流れ、これらに象徴されている佐伯の美しい自然はどうなるのであろうか。

鬱々とせまる城山、山際通りの静かなたたずまい、城下町の面影を今もとどめている門や塀や寒竹垣、思いがけないような所角に姿を見せている古井戸。まだまだ市中にも百年前の歴史が残っている。どうかしてこれらは守りつづけたい。

やがて咲く庭先の梅に、今年も鶯や目白が来てくれるであろうか。野道を歩いていたきの姿を見たり、揚雲雀の声に春の近づいたことを知りたい。菜の花が咲き蝶が舞い、蛍が宵闇にとび交い、蝉時雨が頑童たちを誘い、秋空は高く蜻蛉が流れる——これを老人の郷愁と片付け給うな。楽しかった佐伯の自然は、時の勢いによってどん〳〵こわされている。放っておいてよいものであろうか。

公害追放佐伯市民会議の席に、私は佐伯史談会の代表と言った形で数度招かれた。この会議は決して各種団体の代表者だけのものではない。それは全市民(南部も含めて)皆のものであり、従って一人一人の問題でもある。「国破れて山河あり」という言葉があるが、美しかるべき山河が汚れて何があろう。ついこの間「城山の松、馬場の松」を完全に失ったように、緑の山河を失って我らは何によって生きる喜びを得ることが出来よう。

我らは歴史ある佐伯の美しい山を、野を、川を、海を守ろうではないか。監視し、警告し、保護し、主張しようではないか。我らの郷土は我らの手で守ろう。

心を傾けて努力してほしいと希望するものである。(終)